

知遊自在

不条理を抱きしめて、震災と哲学④

「再生の好機に」といった震災後の呼びかけにも、そんなニュアンスが漂う。

震災が起きて「良かった」――。一般論としては絶対に受け入れられない言葉を、東日本大震災の被災者が自らの人生を肯定しようとして発することがある。震災の不条理を打ち消し、前向きに生きていこうとした時、この苦しい体験があったから、この幸せが得られたと自分に言えるようになりたい。そう願う切実な心境からだ。

福島での原発事故の66年前、日本は広島と長崎で、やはり原子力の被害を受けた。同志社大教授の小原克博さんは、震災の不条理を原爆と重ね合わせて考える。

カトリックの医師で被爆者の永井隆が著した「長崎の鐘」。この本で永井は、原爆投下後の長崎の悲惨な状況を描いたが、ここに原爆が落とされたのは「神の摂理」であり、犠牲者は「潔き小羊」として選ばれた」とも記した。「人間は、自分が受けた苦難に何らかの意味があると思いたい。だが、永井には原爆を一部肯定しているとの批判もあり、いまだに尾を引いている」と小原さんは分析する。

当事者が自らの中で意味を肯定的にとらえ直そうとした時、一般論としての肯定に転換されてしまふ危険性を常にはらんでいる。

神を信じる者がなぜ、苦難を受

けなければならないのか。この問いかけはキリスト教で「神義論」と呼ばれ、今も難問中の難問とされる。金沢大教授の仲正昌樹さんは、そのキリスト教が「現代日本で一種のブームになっている」と指摘する。背景として、キリスト教では「報い」の構造がはつきりしていることが考えられる。

「公平な神がいて、死後の世界で現世の帳尻を合わせてくれる。この世では合わないつじつまも、来世で合わせてくれるから」。仲正さんは、戦後の経済成長期には現世において報われる構造が機能していたとみる。だが、そんな時代が終わり、それでもなお、現世での報いを求めようとした場合に、一部の力利スマ的な政治家に期待が集中することになるのではないか、とも指摘する。

「自分には先が見えないが、その人には、自分や子孫が報われる良い未来が見えていると思わせる人。そういう人に、奇跡のようなことを見せてもらいたいのです」

政治の世界では、一つの方向を決定する「覚悟」が称賛される傾向がある。考え続ける限り、社会は動かず、何かを決めることで「奇跡」は起こる、との思いが根底にあるのだろう。ただ、それ以上考えることをやめ、「未来が見

えている」と感じる指導者に身を委ねる「覚悟」には、宗教にも通じる飛躍性が伴う。

この飛躍で精神が救われる面はあり、だからこそ宗教が成立する。だが、「一度そう決めたのだから」と自分の中でもつじつまを合わせようとし、その決断を絶対視すれば、それ以外にあり得た生き方に目をつぶることになり、その決断が正しかったとますます思いこもうとして縛られていく。

「宗教は、すぐに人生の意味を与えてくれる。でも、ちよつとどまってください、というのが哲学。早く意味を見つけようとする、気づかないうちに、大きな物



東京電力福島第一原発4号機の原子炉建屋。使用済み核燃料の過熱・崩壊という最悪の事態は救われた。2011年11月

災い転じる心の備え

語に巻き込まれてしまふことがある」。仲正さんはそう警告する。

哲学には「おかしい」と感じた時、目を背けたり、その気持ちを否定したりするのではなく、それを自覚的にすくい上げる特性がある。不条理な出来事に対して「飛躍」をする前に、とことん突きつめる哲学が実存主義とされる。

関東学院大准教授の郷原佳以さんも、実存主義の代表格とされるカミュの「シーシュポスの神話」を震災後に読む意義を強調する。「不条理を扱いながら神へと飛躍したヤスパースやキルケゴールをカミュは批判した。超越的なものを立てると楽だが、不条理に踏みとどまらないといけないと考えた」。悩みつつ生きること、一般化されて社会に都合良くすくい取られることに抵抗する生き方を示しているのだろう。

「なぜ私だけこんな目に」という問いに理由が見いだせず、偶然としか答えられない時、人は不条理を感じる。同じ目に遭わなかった他人との境遇の違いを気にして、自己を肯定しようとするあまり、無理な飛躍をしようとしてはいいか。むしろ、不条理をも生む偶然に支配されているからこそ、幸せな未来への転機が訪れるかもしれない、と考えることもできる。そのための心の準備を常にしておくことが、不条理を抱きしめつつ、やり過ぎていくための近道なのかもしれない。（小林正典）

◆「知遊自在」は今回でおわります。